不登校児童・生徒支援事例報告書

校内別室登校について

不登校児童・生徒の状況

・小学校から不登校であった。中学校に進学後も学校に登校するつもりはない。
・学校の様子を聞きたい、配布物をもらいたい、５教科の副教材は買う。
・市内の教育支援センターに通い、オンライン学習にも意欲的に取り組んでいる。
・校内別室登校では、安心して学習できることに魅力を感じている。

具体的な取組

英語

単語を覚えるのが苦手なので、ゲーム式で英単語を覚えることに取り組んでいる。

単語帳に書いてある英単語についてヒントを出し、クイズ形式で発音することをしている。

教科書では、人称の使い方については別々に扱われている。そのため支援員が人称についてまとめたワークシートを作成し、取り組んでいる。

数学

定期考査前に、ワークに取り組んでいる。空間図形では、立体を異なる方向から捉えることができないことがある。模型を用いることで、実際に見て理解につなげることができる。

創作

ストロータワーに取り組んでいる。どのように組み立てたら自立して高いタワーができるかを自分で考え、その考えを言葉で表出する練習をしている。

成果

当該生徒に刺激の少ない環境の下で、学習ができているので安心して過ごしている。

課題

教材を購入する予算がないため、個々の生徒にあった教材を用意できない。

不登校児童・生徒支援事例報告書

不登校生徒の居場所作りについて

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は中学２年生であり、小学生の時から不登校状態が継続している。要因としては、本人を取り巻く環境の変化等で不登校傾向になった。中学校入学時は少しの期間は、登校できたものの、再び学校への足が遠のいてしまい、現在は教室に入れない状況である。

具体的な取組

学校全体で組織的に対応し、学習の遅れの克服やコミュニケーション能力の向上を目指して、個別指導をしている。当該生徒の要望に応じて、丁寧な個別の対応を実践している。

月２～４回、不登校支援コーディネーター（加配教員）が中心となった支援会議を開いている。支援会議では加配教員、各学年教員及び校内別室指導支援員以外に、必要に応じてスクールカウンセラーも参加して、情報共有、支援計画の検討・決定、進捗状況の管理・報告を行っている。

教員に対しては、加配教員及び校内別室指導支援員を通じて、不登校に関する情報を共有している。また、ベテランの教員が今までの経験を生かして、若手教員への指導、助言を行っている。

対象生徒の情報をデータ化し、全教職員で共有できるようにすることで、多面的な指導を行えるようにしている。

成果

週５日開室する校内別室指導教室を設置したことで、不登校生徒の居場所をつくることができた。また、校内別室指導支援員を配置したことで、きめ細かい個別指導が行えるようになり、出席率が約20%から約 60%まで上昇した生徒もいる。

課題

予算の関係で、校内別室指導教室の環境整備が完全には整えられていない。更なる予算措置を必要としている。

不登校児童・生徒支援事例報告書

校内別室指導支援員を活用した全校体制での不登校対応について

不登校児童・生徒の状況

昨年度は遅刻や、保健室を利用しながら登校していた児童である。今年度の途中から、校内別室で過ごす時間が増えてきている。毎日保護者が付き添い登校している。

剣玉、独楽などの遊びを通して支援員との交流関係を築いてきた。本児のペースで授業に参加している。校内別室を利用して、ほぼ毎日登校できている。

具体的な取組

●学校全体での取組

定期的に会議を開き、利用している児童たちの支援の方向性を決めている。支援員、管理職、学級担任、特別支援教育コーディネーターが共通理解することで、一貫性のある対応ができるようにしている。

●校内別室での取組①

教室の中に、本児一人で入ることができないため、教室まで支援員や保護者が付き添うようにしている。

登校時に、担任の先生と挨拶ができるなどのようにスモールステップで、本児のできることを増やすようにしている。

●校内別室での取組②

校内別室での関わりの中で分かった本児の困りごとを担任に伝え、本児の対応に生かした。短時間でも担任とあいさつをする、明日の準備等をホワイトボードで共有するなどの工夫をしている。

●スクールカウンセラーとの連携

本児の校内別室での様子等から判断して、スクールカウンセラーにつなげることになった。今後は、スクールカウンセラーとも情報共有していく。

成果

登校したい気持ちが減っている児童も、校内別室の落ち着いた場所なら登校できるようになっている。

校内別室では一人一人に合わせた対応ができ、利用している児童が安心できる場所となっている。

課題

支援員と学級担任と連携を取り、個々の当該児童に対して一貫性のある対応ができるようにしていく必要がある。

不登校児童・生徒支援事例報告書

不登校対応教室「そよかぜ」の設置について

不登校生徒の状況

当該生徒から、夏休み明けの２学期から、学校に行きたくないという訴えがあった。１学期は学習面や生活面に特に大きな問題や学級での困りごともなく生活をしていたが、夏休みが明ける数日前から、理由は分からないが、なぜか学校に行きたくないということを訴え、学校で対応を行うことになった。

具体的な取組

【別室「そよかぜ」の設置】

不登校対応のための別室「そよかぜ」を設置した。教室以外の場所で、心の安定を図りながら家族以外の人との関わりをもつことを目的とした。対象生徒も、教室には行けないが、落ち着いた場所で勉強したいという要望があり、「そよかぜ」を利用している。

【組織的対応】

担任だけで対応せず、SC と連携し、本人、保護者の面談を行った。SC からの助言により、始業式後の１週間は、心の休養のために家で過ごすことを勧めた。１週間後の SC 面談と同日に不登校コーディネーターと本人、保護者の面談を行い、まずは午前中のみ「そよかぜ」に通うことになった。

【登校支援計画の作成と支援員との連携】

「そよかぜ」に通う生徒を対象に、登校支援計画を作成した。本人、保護者の思いをくみ取りながら、学期ごとの小目標を設定し、生徒の「できた感」を得られるような手だてを校内委員会で検討した。支援員と連携し、生徒との関わりに生かしてもらっている。

【学習環境の整備】

オンラインで授業を流すよう教科担当に依頼し、教室以外でも授業を受けられる環境を整えたことで、教室の生徒と同じペースで学習を行うことができるようになった。また、教科担当の教員に「そよかぜ」に来てもらい、個別に教員への質問等を行える時間も確保した。

成果

教室に入ることは困難だが、学校には通いたいという思いをもった生徒を中心に現在９名が利用している。

「そよかぜ」が自宅以外の居場所となり、不登校の未然防止、他者とのコミュニケーションを行う場としての機能を果たすことができている。

課題

取組のマニュアル化や毎日開設できるように支援員を確保するなど、継続的に運営可能な校内体制の構築が課題である。

不登校児童・生徒支援事例報告書

不登校生徒に対する個別最適な学習環境について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、人が多い空間が苦手である。個別対応で指導ができれば学習にも意欲的に取り組むことができる。これまで授業のない時間に教員が交代で指導をしていた。そのため、どうしても教員が対応できない時間があった。

具体的な取組

時間割表の作成

当該生徒のニーズを確認し、利用時間や内容を特別支援Co.が時間割表に整理している。支援員は、それをもとに一日の支援計画を立て、支援内容や方法を検討し、支援を行っている。

複数の支援員による支援

３名の支援員が交代で支援にあたっている。数名の学習ボランティアも活用して、当該生徒の困っていること、やりたいことに対応している。様々な支援員と関わる機会にしている。

支援空間の整備

多くの生徒が通行しない資料室の一部を別室指導支援教室にしている。個別対応のためにパーテーションを活用したり、休息のためにソファーを置いたりして、安心して過ごせる場にしている。

情報共有の徹底

取り組んだ内容を担任、特別支援 Co.等が共有できるように記録ファイルを用意している。支援員は、校内特別支援委員会に参加し、当該生徒の情報を共有している。

成果

特に学習に関して困り感のある不登校及び不登校傾向のある生徒の居場所、学び直しの場となり、登校日数が増加している。

校内体制を整えたことで、様々な支援を提供することができた。

課題

安定的な支援員の人材確保と、よりよい支援空間の整備が必要である。